

町内遺跡発掘調査報告書

古墳群古墳範囲確認調査2

持田遺跡確認調査

2004.3

宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会

序

本書は、高鍋町教育委員会が平成15年度に実施した縄文時代から古墳時代にかけての2カ所の埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

高鍋町大字持田に所在する国指定史跡持田古墳群のうち円墳5基の古墳範囲確認調査について発掘調査の成果を収録したものです。この持田古墳群古墳範囲確認調査は今年度で第2次の調査となり、多くの資料を収集することができました。

また、同地内に所在します持田遺跡につきまして、その一区域についての遺跡の確認調査を実施し、その成果を収録しております。

本書が、郷土の歴史を学ぶ教材として、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解、さらには学術研究上において役立つことが出来ますれば幸甚に存じます。

持田古墳群内の古墳範囲確認調査および遺跡確認調査におきましては、調査地の地権者や耕作者等関係者のみなさまには多大なるご理解とご協力を賜りました。心から感謝の意を表する次第であります。

平成16年3月

高鍋町教育委員会
教育長 三重野 保

例　　言

1. 本書は、国指定史跡持田古墳群の第19号墳・第29号墳・第31号墳・第33号墳・第78号墳の範囲確認調査及び持田遺跡確認調査の発掘調査報告書である。

2. 調査は、平成15年度に国庫補助金、県費補助金を導入し、高鍋町教育委員会が実施した。

3. 調査の組織

調査の主体　　高鍋町教育委員会

| | |
|---------------|----------------------------|
| 教育長 | 三重野　保 |
| 社会教育課長 | 岩切　昭一 |
| 同　課長補佐兼文化財係長 | 三嶋　俊宏（平成15年12月まで） |
| 同　課長補佐 | 三嶋　俊宏（平成16年1月から） |
| 同　　　　文化財係主査 | 山本　　格（平成15年12月まで） （調査員） |
| 同　　　　文化財係係長 | 山本　　格（平成16年1月から） |
| 同　　　　文化財係主任主事 | 小澤　宏之（平成16年1月から） |

調査指導　　宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係

特別調査員　徳島文理大学 助教授　大久保　徹也（持田古墳群範囲確認調査）

4. 図面の作成は、山本が行なった。

5. 遺物・図面の整理は、高鍋町教育委員会において、山本が行い整理作業員がこれを補助した。

6. 本書に使用した写真は、山本が撮影した。空中写真については(有)スカイサーベイ九州に委託した。

7. 本書に使用した座標は、測地成果2000で、土地家屋調査士徳田公正に委託した。

8. 本書に使用した方位は磁北で、高さは、海拔絶対高である。

9. 本書の編集・執筆は、山本がおこなった。

総 目 次

持田古墳群古墳範囲確認調査 2

本文目次

| | |
|--------------------------------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査にいたる経緯 | 1 |
| 第2節 立地と環境 | 1 |
| 第2章 調査の概要 | 3 |
| 第1節 調査の概要 | 3 |
| 第2節 第19号墳 | 4 |
| 第3節 第29号墳 | 4 |
| 第4節 第31号墳 | 4 |
| 第5節 第33号墳 | 4 |
| 第6節 第78号墳 | 5 |
| 第3章 まとめ | 5 |
| 挿図目次 | |
| 第1図 調査地付近遺跡分布図（1／10,000） | 2 |
| 第2図 調査地位置図（1／5,000） | 3 |
| 第3図 第19号墳調査トレンチ位置図（1／200） | 6 |
| 第4図 第29号墳調査トレンチ位置および遺構図（1／200） | 6 |
| 第5図 第31号墳調査トレンチ位置および遺構図（1／200） | 7 |
| 第6図 第33号墳調査トレンチ位置および遺構図（1／200） | 7 |
| 第7図 第78号墳調査トレンチ位置図（1／200） | 8 |
| 図版目次 | |
| 図版1 第19号墳1号・4号・6号トレンチ調査状況 | 9 |
| 図版2 第29号墳1号・4号・6号トレンチ周溝の状況 | 10 |
| 図版3 第31号墳調査トレンチ・1号・6号トレンチ周溝の状況 | 11 |
| 図版4 第33号墳1号・2号・3号トレンチ周溝の状況 | 12 |
| 図版5 第78号墳調査トレンチ・2号・6号トレンチ調査状況 | 13 |

持田遺跡確認調査

本文目次

| | |
|---|----|
| 第1章 はじめに | 17 |
| 第1節 調査にいたる経緯 | 17 |
| 第2節 立地と環境 | 17 |
| 第2章 調査の概要 | 19 |
| 第1節 調査の概要 | 19 |
| 第3章 まとめ | 20 |
| 挿図目次 | |
| 第1図 調査地位置および付近遺跡図（1／5,000） | 18 |
| 第2図 調査地内トレンチ位置図（1／500） | 19 |
| 図版目次 | |
| 図版1 調査対象区全景、1号・5号トレンチ調査状況 | 21 |
| 図版2 6号・13号トレンチ調査状況・17号トレンチ集石遺構の検出状況 | 22 |
| 調査抄録 | 23 |

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

宮崎県児湯郡高鍋町大字持田には、昭和36年に国の史跡指定を受けた持田古墳群がある。この古墳群を保存し公開することを目的として、平成13年度に高鍋町教育委員会が、持田古墳群整備計画書を策定した。この計画書は、同古墳群の長期にわたる整備の基本計画である。

この計画をもとに、平成14年度から古墳群の整備に必要な基礎資料の収集を実施している。今年度は、その第2年次の調査となり、円墳の第19号古墳、第29号古墳、第31号古墳、第33号古墳、第78号古墳について、古墳範囲確認調査を実施することになった。

第2節 立地と環境

高鍋町は、東に日向灘に面し、市街地がひろがる海拔約10m未満の沖積平野を北・西・南から、海拔約50mから約70mの洪積台地が取り囲む地形をしている。この沖積平野を九州山地に発した小丸川が北東から南東に貫流し日向灘にそそぐ。

持田古墳群の主群は、この沖積平野の北辺で小丸川の北岸にあたる標高約60mの洪積台地の縁辺に位置しており、台地面に発生した沢がつくる谷が北から東へ走り、舌状に張り出す台地面に位置する。ここには、前方後円墳9基と円墳60基が分布する。この台地面には、持田遺跡として周知され弥生時代末期の住居跡も確認されている。

持田台地の舌状の南端には、持田中尾遺跡が知られる。旧石器、縄文、弥生前期～後期、古墳時代にわたる遺跡で、弥生時代の竪穴式住居跡2軒、割竹形木棺をもつ円墳が調査された。

同台地の東の谷を隔てた対岸の台地面には、上ノ別府遺跡があり、古墳時代後期の竪穴式住居跡9軒が検出された。同台地の北の谷を隔てた対岸の台地面には、下り松遺跡があり、縄文から弥生時代の遺跡として周知されている。

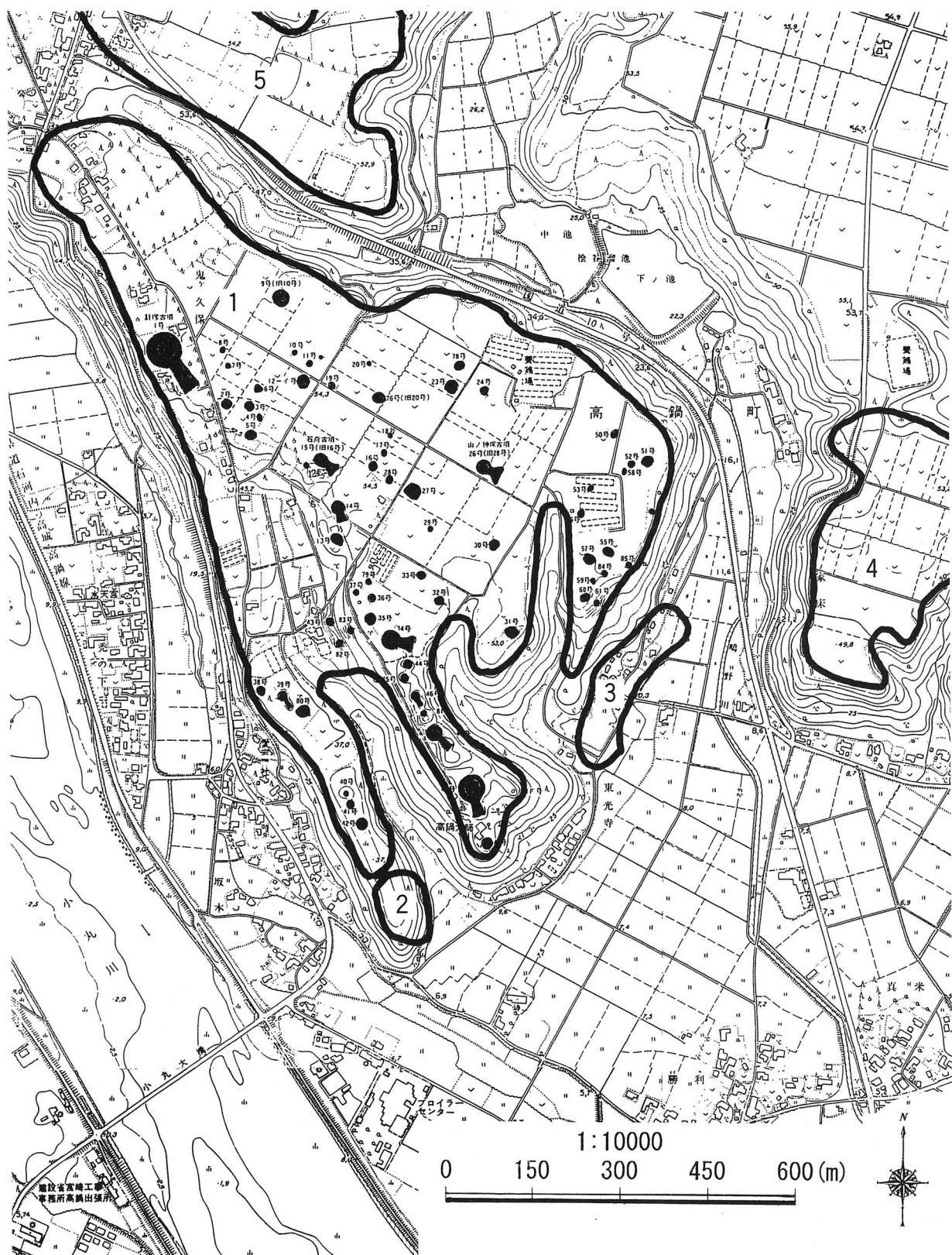
さらに、同台地の東端の裾部の微高の平坦面は、東光寺遺跡があり、古墳時代の遺跡である。ここには、室町時代の永禄五年（1562）に建立の十三仏板碑（笠塔婆）がある。

江戸時代には、古墳群の西辺の台地面を高鍋藩主は参勤交代の道としていた。

昭和40年代になり、古墳群周囲の畠地に、ほ場整備事業が実施され今日の景観となった。

【参考文献】

- 『お染ヶ岡特殊農地保全事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1979 宮崎県教育委員会
- 『持田中尾遺跡』1982 高鍋町教育委員会
- 『高鍋町史』1987 高鍋町教育委員会
- 『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』1989 高鍋町教育委員会



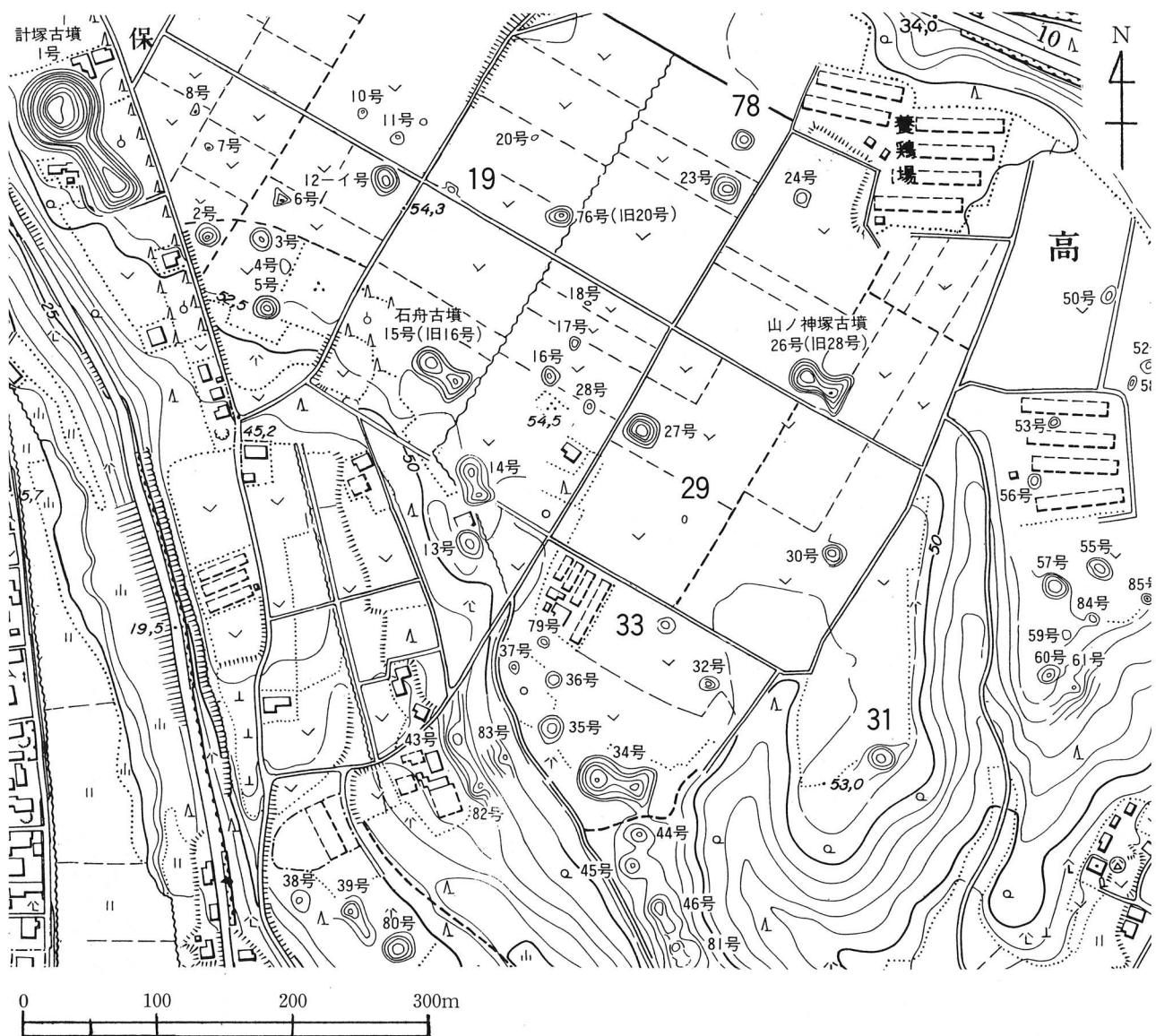
- | | |
|--------------|----------|
| 1 持田古墳群・持田遺跡 | 2 持田中尾遺跡 |
| 3 東光寺遺跡 | 4 上ノ別府遺跡 |
| | 5 下り松遺跡 |

第1図 調査地付近遺跡分布図 (1/10,000)

第2章 調査の概要

第1節 調査の概要

古墳範囲確認調査を実施した古墳は、すべて円墳で第19号古墳、第29号古墳、第31号古墳、第33号古墳、第78号古墳の5基である。墳丘の周囲を調査対象としたが、道路等によりトレーニングを設定できない箇所もあった。調査の期間は、平成15年12月19日に開始し、平成16年3月末日に終了した。調査トレーニングの面積は、約173.5m²である。



19 第19号墳 29 第29号墳 31 第31号墳
33 第33号墳 78 第78号墳

第2図 調査地位置図 (1/5,000)

第2節 第19号古墳

第19号墳は、現況で直径約10mの円墳、墳丘の高さ約1.4mである。古墳は楕円形をしており、南西側に道路が通っている。この古墳の周囲の畑地に北西から北を経て南東の方向に6本のトレントレンチを設定した。

1号から6号のトレントレンチにおいて、耕作土下約30cmで地山面の地層となった。すべてのトレントレンチにおいて同じ結果であった。古墳の周溝は確認できなかった。すべてのトレントレンチにおいて遺物の出土もみられなかった。

第3節 第29号古墳

第29号墳は、現況で直径約9mの円墳、墳丘の高さ約1.6mである。古墳は楕円形をしている。古墳の北西から北を経て南東側の畑は、農作物のため、調査トレントレンチは、墳丘の南東から南を経て北西の方向に6本のトレントレンチを設定した。

1号から6号のトレントレンチにおいて、耕作土下約50cmでアカホヤ火山灰層面を検出し、黒色土の箇所を検出した。この部分を精査し、古墳の周溝の良好な遺存を確認した。地層の状態も通常に当地付近でみられる層位を示し遺存は良好である。

古墳の周溝は、1号トレントレンチの検出面で幅約2.1m、深さ約1mで墳丘側への溝の立上がりが、外側へのそれに比べて急斜である。1号と6号トレントレンチは、一線上の設定で、これらから確認した古墳の周溝の検出面（現地面下約50cm）での各々の外側までは、約17.3mである。

1号から6号のトレントレンチにおいて、周溝の埋土からは、須恵器、土師器、石器等を出土した。

また、5号トレントレンチでは、周溝の内側、かつての墳丘部分から土器片や小穴跡を確認した。

第4節 第31号古墳

第31号墳は、現況で直径約19mの円墳、墳丘の高さ約3.2mである。古墳は円形をしている。古墳の西から南を経て東側は山林で、北面は畑で山林部分より約50cm低くなる。調査のトレントレンチは8本で、墳丘から南方を除く7方向に各1本、西北西に1本を設定した。墳丘の北面の畑地に設定した、1号から4号のトレントレンチでは、耕作土下約40cmで地山の層となったが、周溝の最底部を検出した。1号トレントレンチでは、幅約2.7m、深さ約20cmで周溝の底部が遺存し、2号～4号トレントレンチでは、周溝の最底部の遺存は10cm未満であった。

墳丘西から東への山林に設定した、5号～8号のトレントレンチでは、表土下約40cmで周溝を検出した。古墳指定範囲の外にトレントレンチを設定したので、6号トレントレンチでのみ古墳周溝の幅を確認できた。同地では、現地表下約50cmの検出面で、周溝幅約3.3m、深さ約50cmである。1号と6号トレントレンチは、墳丘を横断する一線上に設定し、これらから確認した古墳の周溝の検出面（現地面下約50cm）での各々の外側までは、約26.5mである。ただし、1号トレントレンチでの周溝の外縁の立上がりが削平されているため、築造時はこれより大きいものと推定できる。

1号・4号トレントレンチで土師器片の出土があった。

第5節 第33号古墳

第33号古墳は、現況で直径約13mの円墳、墳丘の高さ約2.3mである。古墳は北東側を通る道路により一部削平を受けている。古墳の東から南を経て南西側は茶畠のため、調査対象外とした。

墳丘の北西側の畑に、3本の調査トレンチを設定した。

各トレンチにおいて、耕作土下約60cmで検出したアカホヤ火山灰層面に、古墳の周溝を検出した。3本のトレンチで周溝を精査した。2号トレンチでは、周溝の検出面で幅約2.5m、深さ約1mである。墳丘側への溝の立上がりが、外側へのそれに比べて緩やかである。3号トレンチでは、周溝の外側に、別の溝状遺構を確認した。

各トレンチの周溝内の埋土から、須恵器、土師器、石器等を出土した。

第6節 第78号古墳

第78号古墳は、現況で直径約15mの円墳、墳丘の高さ約3mである。古墳の北東側と南西側は、茶畠のため調査対象外とした。古墳の南東側と北西側に7本のトレンチを設定した。

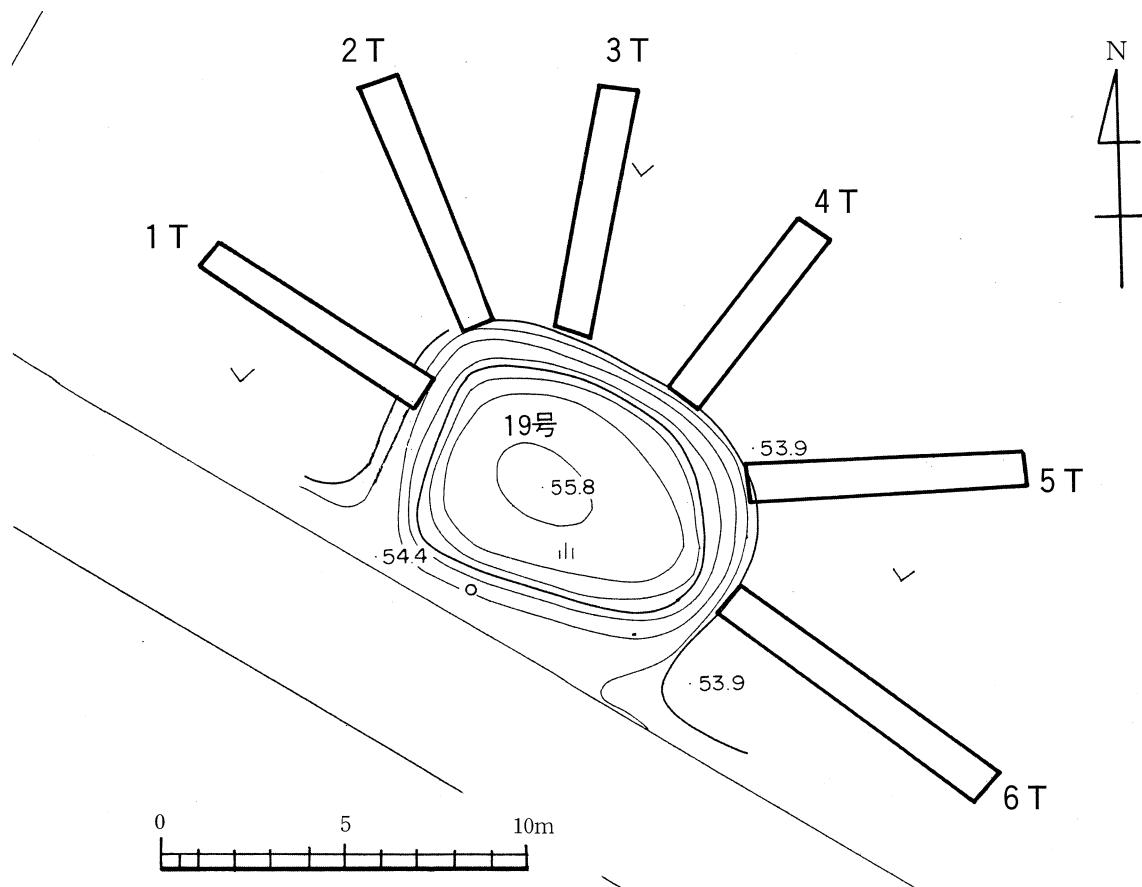
各トレンチにおいて、耕作土下約40~50cmで地山面の地層を検出し、畑を深耕した跡が筋状にあった。1号・4号~7号トレンチでは約5cm程度の埋土状の黒色土を検出したが、埋土の状況から古墳周溝とは別のものであると考えられる。各所での遺物の出土はなかった。

第3章 まとめ

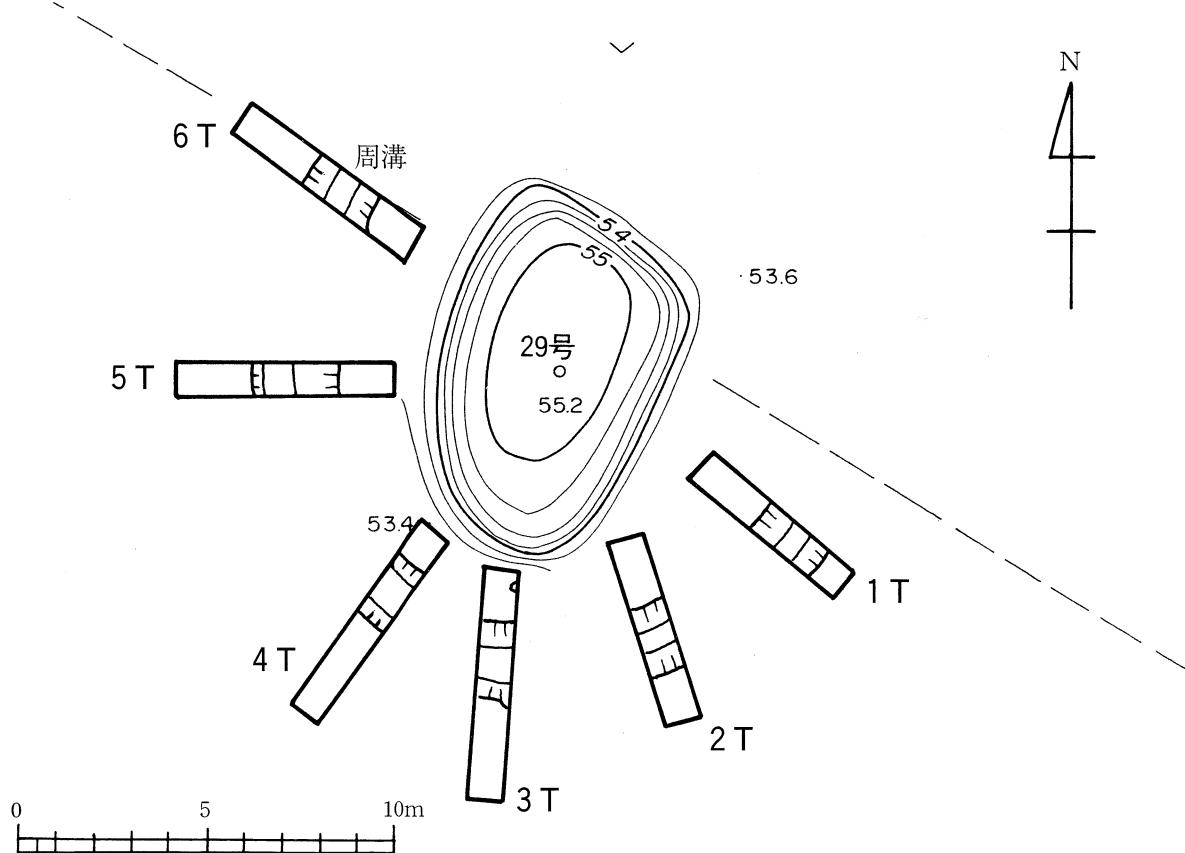
今回の調査では、現在までの耕作や場整備等のため古墳築造時の地形に大きな変化を受けている箇所と、変化を受けていない箇所や古墳周溝の良好な形状を確認できた。

古墳周辺の地層削平を確認できた箇所は、第19号墳・第78号墳の周囲である。ここでは、古墳周溝を確認できなかった。これらの古墳が、築造時から周溝をもたない古墳であったか、周溝を後に削平されたものか、否かについては判明できない。今後の調査の課題である。

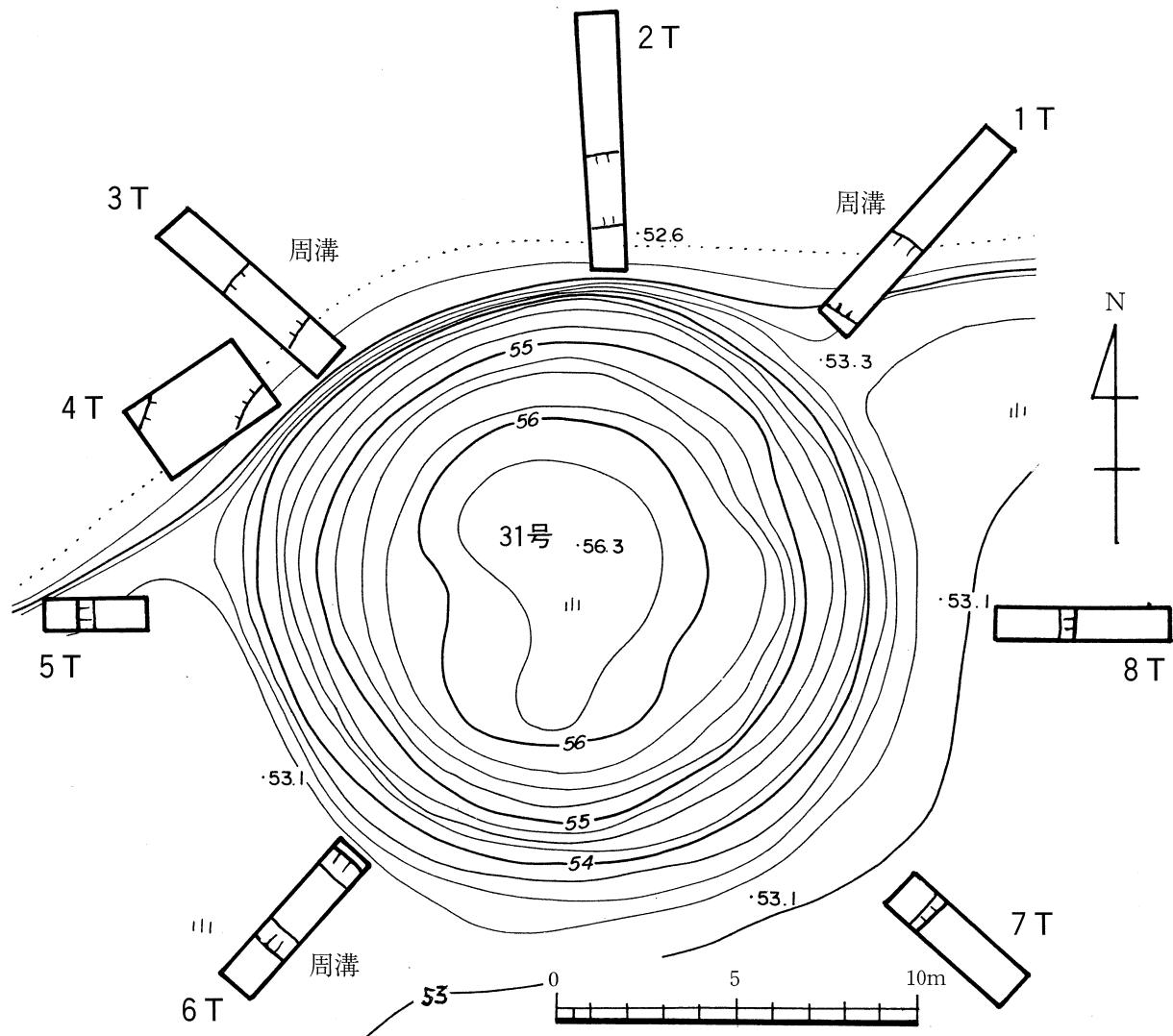
古墳周辺の地層が古墳築造時から大きく変化を受けていないと判明した箇所は、第29号墳・第31号墳・第33号墳の周囲である。これらの古墳には、古墳周溝が良好に遺存し、その状況が判明し、周溝内から須恵器片など多くの遺物を得た。付近は、地層の遺存も良好で、第29号墳・第33号墳付近は台地面でも緩い谷地形であったか、その縁に位置する箇所であったことがいえる。これらの3基の古墳は、周溝内に葺石とみられる石の出土もまばらであり、葺石をもたないタイプの円墳であると考えられる。今回の調査で、第31号墳は古墳の範囲を確定できた。第29号墳・第33号墳について、四方に墳丘を横断する形でトレンチの設定が不可能であった。これらについては、今後の機会をとらえて古墳周溝の確認を実施し、古墳の範囲を明確にしていきたい。



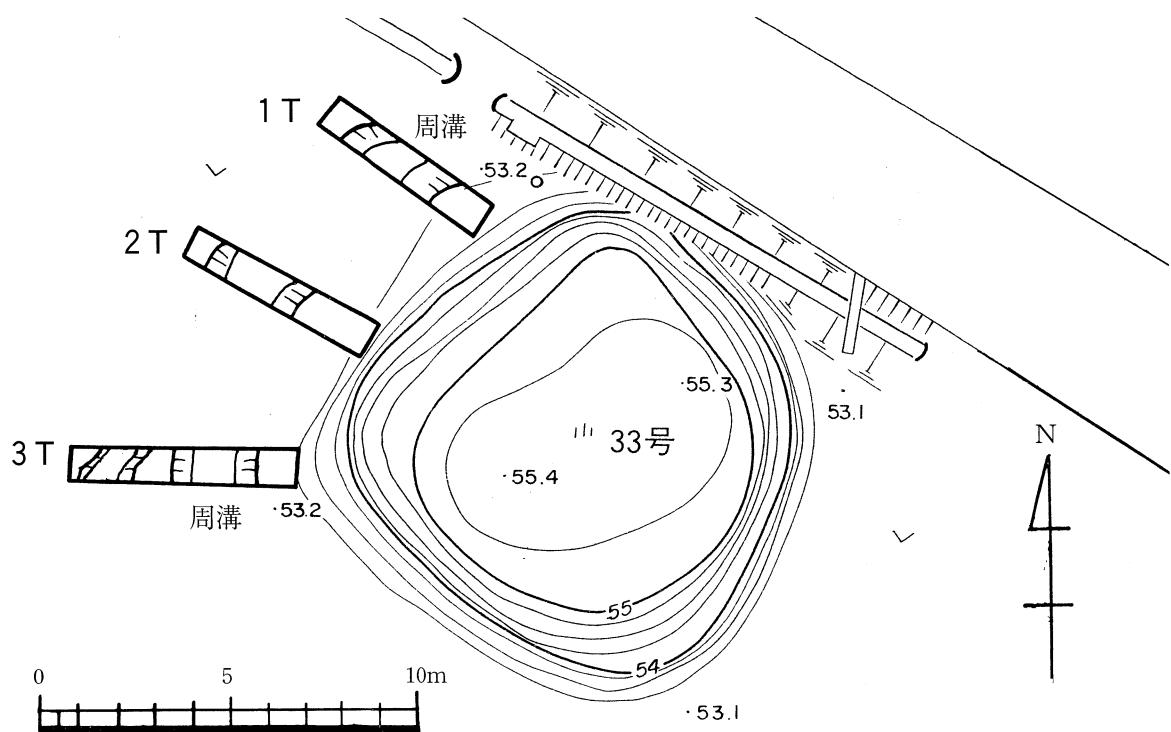
第3図 第19号墳調査トレンチ位置図（1／200）



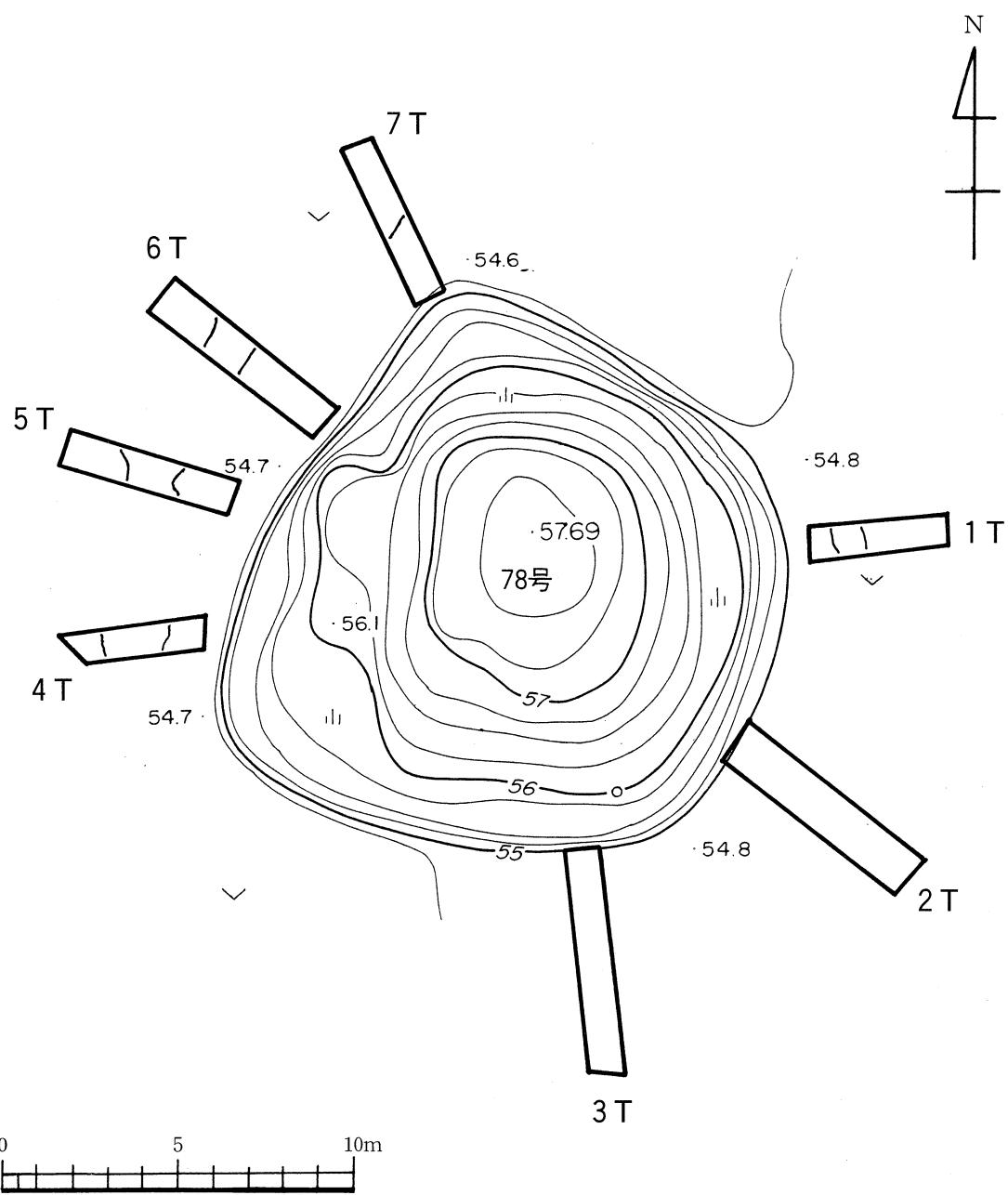
第4図 第29号墳調査トレンチ位置および遺構図（1／200）



第5図 第31号墳調査トレンチ位置および遺構図（1／200）



第6図 第33号墳調査トレンチ位置および遺構図（1／200）



第7図 第78号墳調査トレンチ位置図 (1/200)

図版 1



持田第19号墳
1号トレンチ
調査状況
(西から)



持田第19号墳
4号トレンチ
調査状況
(東から)



持田第19号墳
6号トレンチ
調査状況
(南から)

図版 2



持田第29号墳
1号トレンチ
周溝の状況
(南から)



持田第29号墳
4号トレンチ
周溝の状況
(南から)



持田第29号墳
6号トレンチ
周溝の状況
(西から)



持田第31号墳
調査トレンチ
の状況
(上が1号
トレンチ)



持田第31号墳
1号トレンチ
(墳丘側)
周溝の状況
(北から)



持田第31号墳
6号トレンチ
周溝の状況
(南西から)

図版 4



持田第33号墳
1号トレンチ
周溝の状況
(奥に墳丘)
(北西から)



持田第33号墳
2号トレンチ
周溝の状況
(奥に墳丘)
(北西から)



持田第33号墳
3号トレンチ
周溝の状況
(奥に墳丘)
(北西から)



持田第78号墳
調査トレンチの
状況
(右上が1号
トレンチ)



持田第78号墳
2号トレンチ
調査状況
(南東から)



持田第78号墳
6号トレンチ
調査状況
(墳丘上から)
(南東から)

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

宮崎県児湯郡高鍋町大字持田の台地面には、国史跡の持田古墳群が「持田遺跡」として認知され、極めて利用されている。この持田遺跡の一帯において、既存のものでは改路新設計画が策定されたため、その暫定線と考えられている箇所の一部は、かつて山林であったため、以前に実施された大型機を農地のは場整備事業においては、事業実施地外であった。

そのため、高鍋町教育委員会では、調査の結果を踏まえ、改路新設計画を実施することができなくなった。調査は、平均標高約50mの台地面積約55.3haである。

持田遺跡確認調査

第2節 立地と環境

高鍋町は、東に日向灘に面し、市街地がひろがる海抜約10m未満の沖積平野を北・西・南から、海抜約50mから約70mの洪積台地が取り囲む地形をしている。この沖積平野を九掛川地を発した小九川が北西から南東に貫流し日向灘にそそぐ。

持田遺跡の範囲は、持田古墳群の主群の分布範囲と同域で、小九川の北岸にあたる標高約60mの洪積台地に位置している。

今回の調査対象地は、持田古墳群の西邊に位置し古墳群の多くが分布する標高約50mの台地面から、南東方向と南西方向に緩やかに下る斜面に位置する。

同地の北西約300mには、持田古墳群で最大の墳長約120mで前方後円墳である計塚がある。同方に約60mには、鬼ヶ久保B遺跡と称される、既に削平された円墳の主体部で、南西に開口した河原石積みの石室で、底辺約4.3m、幅が奥側で約0.8m、現存の石積みの高さ約0.6mであった。副葬品は、銅環、杯、鉄鏃、勾玉、管玉が出土している。

また、南西に約200mを隔てた箇所では、昭和41年の宮崎県教育委員会の発掘調査により、弥生時代後期の住居跡有2軒確認されている。

さらに、前述地約100mには、墳丘約46mで後円部に阿蘇赤燒灰岩層のみが石棺がある石用塚がある。

参考文献

『高鍋町遺跡許可守布調査報告書』1989、高鍋町教育委員会

『宮崎歴史・文化編』1992、宮崎県

『宮崎県史稿・宮崎県西方後円墳集成』1997、宮崎県

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経緯

宮崎県児湯郡高鍋町大字持田の台地面には、国史跡の持田古墳群があり、持田遺跡としても周知され、畑として利用されている。この持田遺跡の一角において、高鍋町による道路新設計画が策定中であった。その予定線と考えられている箇所の一部は、かつて山林であったため、以前に実施された大規模な農地の整備事業においては、事業実施地外であった。

そのため、高鍋町教育委員会では、同区域の埋蔵文化財の有無について確認調査を実施することとなった。調査は、平成16年3月5日から同年3月末日まで実施し、トレーニングによる調査面積は、約55.2m²である。

第2節 立地と環境

高鍋町は、東に日向灘に面し、市街地がひろがる海拔約10m未満の沖積平野を北・西・南から、海拔約50mから約70mの洪積台地が取り囲む地形をしている。この沖積平野を九州山地に発した小丸川が北西から南東に貫流し日向灘にそそぐ。

持田遺跡の範囲は、持田古墳群の主群の分布範囲と同域で、小丸川の北岸にあたる標高約60mの洪積台地に位置している。

今回の調査対象地は、持田古墳群の西辺に位置し古墳群の多くが分布する標高約50mの台地面から、南東方向と南西方向に緩やかに下る斜面に位置する。

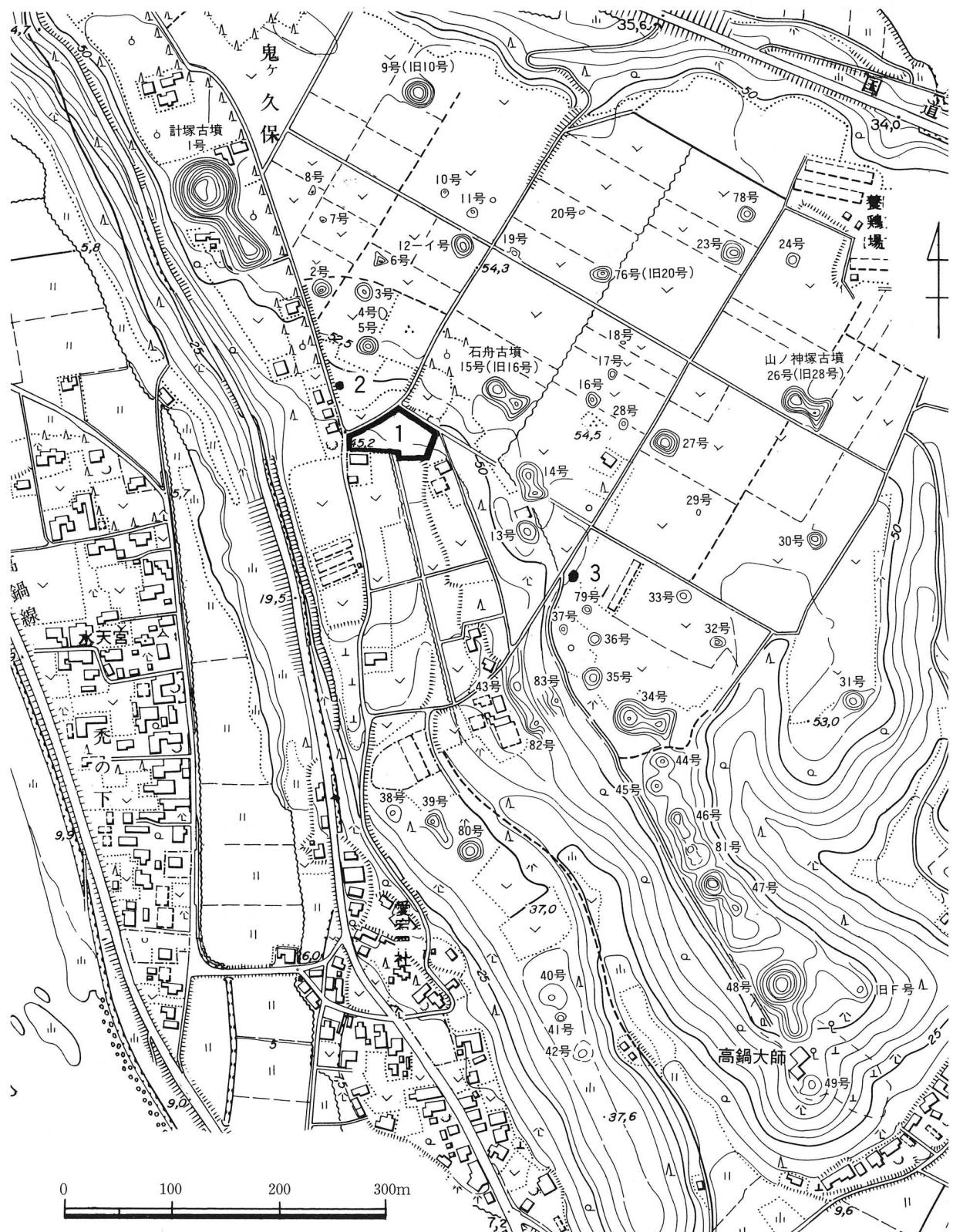
同地の北西約300mには、持田古墳群で最大の墳長約120mで柄鏡形の前方後円墳である計塚がある。同方に約60mには、鬼ヶ久保B遺跡と称される、既に削平された円墳の主体部で、南西に開口した河原石積みの石室で、長さ約4.3m、幅が奥壁で約0.8m、現存の石積みの高さ約約0.6mであった。副葬品は、銅環、杯、鉄鏃、勾玉、管玉が出土している。

また、南西に約200mを隔てた箇所では、昭和41年の宮崎県教育委員会の発掘調査により、弥生時代後期の住居跡も2軒確認されている。

さらに、東北東約100mには、墳長約46mで後円部に阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺がある石舟塚がある。

【参考文献】

- 『高鍋町遺跡詳細分布調査報告書』1989 高鍋町教育委員会
- 『宮崎県史 資料編 考古2』1993 宮崎県
- 『宮崎県史叢書 宮崎県前方後円墳集成』1997 宮崎県



1 調査対象地（持田遺跡内）
3 弥生時代後期の住居跡

2 鬼ヶ久保B遺跡（無号石室墳）

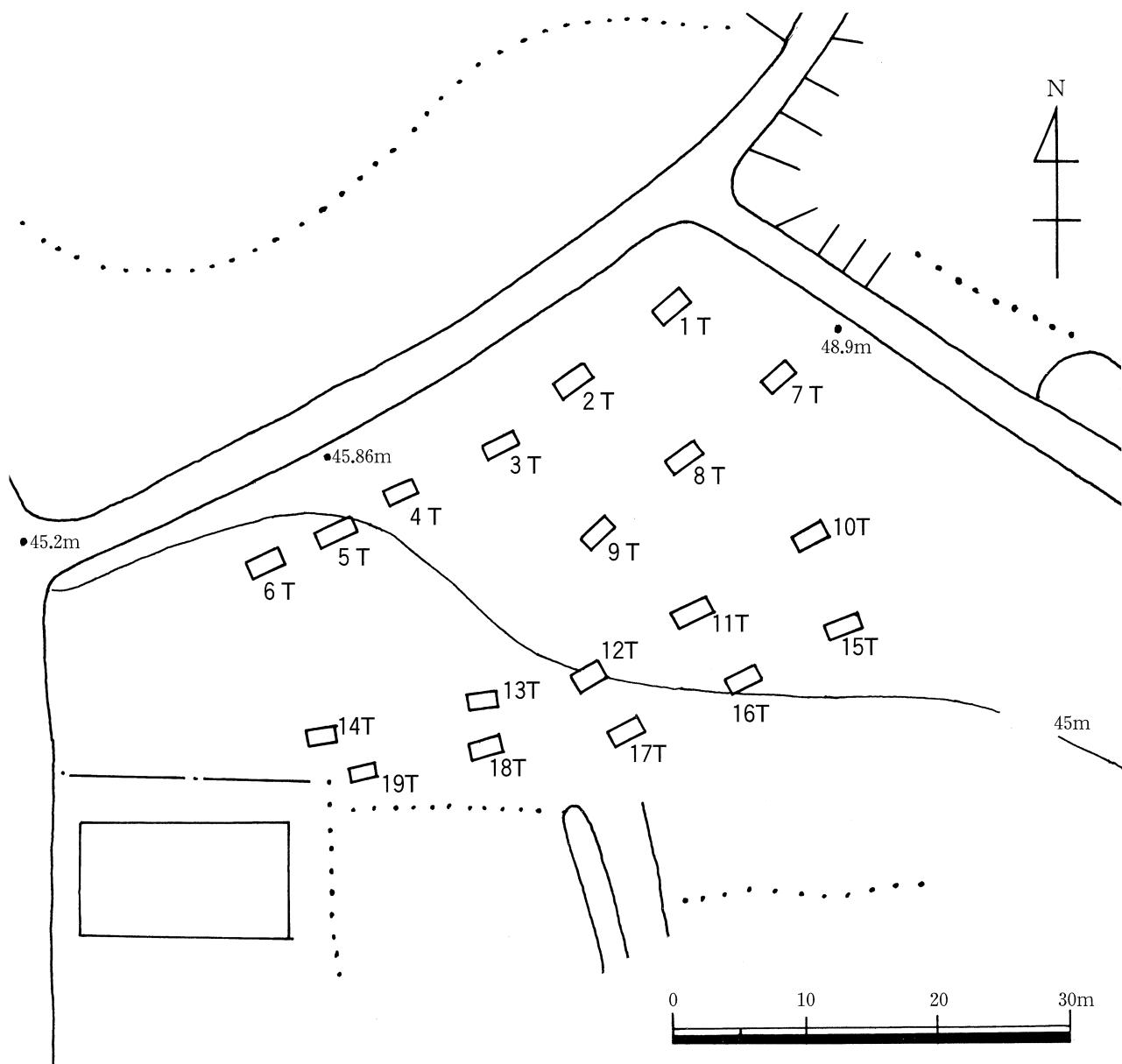
第1図 調査地位置および付近遺跡図 (1/5,000)

第2章 調査の概要

第1節 調査の概要

今回の確認調査は、持田遺跡内で持田古墳群の隣接地で、山林であったためは場整備の実施されていない区域であったため、地下については、地層の良好な状態が想定された。

調査の対象地は、縦約40m、横約30mで新設道路の工事が想定される範囲とした。ここに、縦約1m、横約3mを基準として試掘のトレンチを4列に合計19カ所設定し、各々のトレンチにおいて遺構・遺物の所在確認を目的とした調査を実施した。



第2図 調査地内トレンチ位置図 (1/500)

19カ所に設定したトレーニングのうち、第1トレーニングでは、黒色土の表土の下層にあるアカホヤ火山灰層の面に、小穴跡や、住居跡または土壤の一部と考えられる遺構を検出した。遺物の出土はなかった。

第5トレーニングでは、アカホヤ火山灰層下層に達する小穴跡を検出した。遺物の出土はなかった。

第6トレーニングでは、アカホヤ火山灰層面において小穴跡を検出した。遺物の出土はなかった。

第13トレーニングでは、アカホヤ火山灰層は、遺存していなかった。遺物の出土はなかった。

第17トレーニングでは、アカホヤ火山灰層の下層にあたる褐色土層において、直径約1mほどであろうと考えられる集石遺構を検出した。この集石遺構については、精査までは実施していない。遺物の出土は確認できなかった。

第10・第15トレーニングなど斜面の裾部分にあたる箇所では、地山の山砂利の地層を確認した。

第3章　まとめ

今回の調査では、事業予定区域が決定していないため、広範囲について、確認調査を実施した。全体として、地下の土層の遺存状況は良好であることが確認できた。

遺構については、存在が確認できたのは、縄文時代と考えられる集石遺構が1基、時期の特定にはいたらないが、弥生時代のものと考えられる小穴跡や、住居跡の可能性を持つ遺構の一部も確認できた。

また、遺物の出土は確認できなかったが、遺構の分布していることから考えると、遺物も所在する可能性が高い。

現地が、南面に開いた緩やかな谷地形をしていることから、住居跡のまとまる区域である可能性もある。さらに、持田古墳群の範囲内であることから、消滅古墳の存在も考えられる。

道路新設工事計画が決定された場合には、今回確認した同地の埋蔵文化財の資料をもとに、これらの保護と保存について、事業者との協議をすすめていきたい。

図版 1



図版 2



持田遺跡
確認調査
6号トレンチ
調査状況
柱穴検出状況
(西から)



持田遺跡
確認調査
13号トレンチ
調査状況
(北西から)



持田遺跡
確認調査
17号トレンチ
集石遺構の
検出状況
(北西から)

調査抄録

| ふりがな | チョウナイイセキハックツチョウサホウコクショ | | | | | | | |
|---|--|---------|-------------|---------------------|---|----------------------|------------------------|-------------|
| 書名 | 町内遺跡発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 副書名 | 持田古墳群古墳範囲確認調査2 持田遺跡確認調査 | | | | | | | |
| 卷次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 高鍋町埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第10集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 山本 格 | | | | | | | |
| 発行機関 | 高鍋町教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 宮崎県児湯郡高鍋町大字上江1138番地 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 2004年3月 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 。〃〃 | 東経 。〃〃 | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
| | | 市 町村 | 遺跡 番号 | | | | | |
| もちだこふんぐん 持田古墳群 19号墳 29号墳 31号墳 33号墳 78号墳 | みやざきけんこゆぐん 宮崎県児湯郡 たかなべちょうおおあざもちだ 高鍋町大字持田 あざにしがはら 字西ヶ原、 あざせきしょ 字閑所 | 45401 | 1001 | 32° 08" 57" | 131° 31' 11" | 20031219 20040330 | 173.5 | 古墳 範囲確認 |
| もちだいせき 持田遺跡 | たかなべちょうおおあざもちだ 高鍋町大字持田 あざにしがはら 字西ヶ原 | 45401 | 1010 | 32° 08" 60" | 131° 30' 59" | 20040305 20040330 | 55.2 | 遺構等 確認試掘 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | | |
| 持田古墳群 19号墳 29号墳 31号墳 33号墳 78号墳 | 古墳 | 古墳 | 古墳周溝 | 弥生土器 須恵器 打製石斧 | 古墳（円墳）の周溝が良好に遺存していることを確認。 古墳周辺の土層の削平も確認。 | | | |
| 持田遺跡 | 散布地 | 縄文～古墳 | 柱穴・集石 遺構 | | 縄文～弥生時代にかけての遺構が所在。 | | | |

高鍋町埋蔵文化財調査報告書 第10集
町内遺跡発掘調査報告書

持田古墳群古墳範囲確認調査2
持田遺跡確認調査

2004年3月

編集・発行 宮崎県児湯郡高鍋町教育委員会
印 刷 (株)印刷センタークロダ
宮崎市大橋2丁目175番地
〒880-0022 電話24-4351番

